した補助兵が櫛の歯がぬけるようにいなくなるのには弱った。しかも武器を携行しての脱走である。まだ軍隊としての反乱でなく幸せであった。一方インドネシア独立の動きも盛んになり、わが軍も警戒を深めていた。

八月十五日の大詔は、数日過ぎてからバンガ島で聞いた。日本軍はイギリス軍に投降し、後は、その支配下に入ることが条件である。蘭領東インドと言う以上オランダ軍がきて終戦処理をすべきだと思ったが、すべてイギリス軍が代行した。イギリス軍の戦犯追求は厳しいと聞いたがそれほどでもなかった。しかし抑留中の待遇・食事・労働は厳しかった。

昭和二十一年九月、広島の大竹港に復員、父と共に山内工業株式会社を設立した。

現在子供達にも恵まれ平和な生活を過ごしている。

十数年前、家内とジャワ、スマトラ旅行に参加したが、当時の田園風景は面影を残していたが、大都市は大きく変化し、昔とは様変わりだった。

ときどき写真を取り出し、昔と今を較べて振り返って見ている。

南方石油部隊
（ジャワ・チェプー製油所）
新人社員としての体験

大分県　足穂正人

大東亜戦争は「石油に始まり、石油に終わった」と言われています。その、きびしい体験は、第一線の兵士以上の重い任務を背負った私でありました。

当時、私は満州国関東州大連の甘井子に在った「満州石油株式会社」の大連工場勤務でありました。この工場は、アメリカから三流品の石油を輸入して、軍や民間への石油類を精製して、供給し

ていたのです。

このような時に、我が国は米英を敵に回して開戦をしたのですから、私ごとき新人社員でも、日本の前途に不安を持ったことは事実であります。この状況下、関東軍から会社に対し、南方油田地帯の復旧のための人員・資材供給の命令が出たのであります。

入社僅か一年半の私は、社命により第二次派遣隊のメンバーに加えられ、昭和十七（一九四二）年五月上旬、長男の出生を見届けて大連港を出発したのです。国民として、社員として、心の中は残った妻や出生したばかりの赤子を心配しつつの複雑な心境でありました。

船は川崎汽船の二〇〇〇トン足らずの「梅川丸」、一五〇人の人員と、二〇〇〇トンの資材を積み、まずは台湾を目指す。高雄へ入港する予定でありましたが、コレラ患者を出した船舶の防疫で、沖泊まりということになり、物資の補給のみで、四隻の船団を組み、一路南下したのであります。その間は護衛の駆逐艦が二隻、何日間かついてくれたことに心強さを感じながらの航海でありました。

中国大陸近くをジグザグ航法です。我々の居住場所たる船底の大部屋は蒸し暑く、退屈の限りでありました。ある日、突然の衝撃音と振動に狼狽し、上甲板への昇り口に殺到した数人はいましたが、朝の命令受領で砲の試射だと気付くと、船内の動揺は収まりましたが、二〇〇〇トン足らずのぼろ船に乗った我々乗員の心境は「心細い」の一語につきる、不安な日々でありました。甲板にある砲は気休めの小さいもの。他に木製の擬砲もありました。監視哨には交代で立つのですが、緊張したためか、不思議に船酔いもせず、気の持ちようだと自覚もしました。

途中、サイゴンに上陸、南方燃料廠本部に出掛けた幹部は、かなり遅く帰隊しました。聞きますと、「ビルマへ行け」とのことで、ジャワの復旧

のための資材しか積んでいないことを強調して、やっと、ジャワ行きの了解を得たということでした。

昭南（シンガポール）港寄港後は単独航行ということになり、赤道を越えた日は覚えていません。海蛇を見たのが話の種になったぐらい。スラバヤ港へ上陸したのは昭和十七年六月十二日でした。

南方燃料廠ジャワ支廠の本部がある建物はそれまでオランダのベーペーエムの事務所でした。製油所、貯油所への配属がきまり、小生は岡第一〇三〇三部隊諏訪隊、任地はスラバヤから西へ一〇〇キロのチェプーでした。製油所は蒸留装置、精蠟装置等は爆破されていましたが鉄工場、荷造場、加鉛装置、試験室の被害は少なかった。略称「独工三」の隊が警備等に当たっていて、事務引継ぎをして本格的復旧に入りました。

連続蒸留装置は基礎からやり直しました。その起工式には現地の習慣を重んじて、殺したての牛の頭を地下深く埋めることから始まりました。乾季が終わる頃からだんだん雨季へ移ると夕方スコールが来る。このタイミングがだんだん早くなってやがて朝から一日中降るのである。約一カ月の間、陽の目を見ない日もあったのです。

昭和十八年はまず一応順調に生産は上がって作命（作戦命令）をこなしていました。勿論トラブルや人身事故も偶発しました。早朝原料タンクからの送油がうまく行かぬという入電があり、調べますとボイラーからのスチームが弱まっている。原油の融点が高いので二重パイプへのスチームが不良であると判って塔の方は循環にはいって急場を凌いだのです。普通の原油では考えられないことでした。

ダブス式の熱分解装置の旧式のがありました。昔なつかしいウォーシントンポンプで、ひやひやの運転で、たまに油漏れして発火するのですけれど、スチームで消火していました。

一度空襲警報下に出火して慌てたことがありま

したが雲がたれこめていて天佑でした。タンクが古くて計測に行った現地人が行方不明となり、調べますと上部マンホールの縁に手のあとがついている。タンクの油を移したら、油漬けの死体となって発見され可哀想なことでした。日本式に木棺を用意して葬りましたが遺族から感謝されました。

再蒸留装置では焚口に防弾壁があったばかりに、火入の時のバックファイヤーで若い現地人が壁に激突、死亡した事故がありました。タンク車の積荷作業でも事故がありましたが、一応整って、火入式を行ったのは昭和十七年も押し迫った十二月の二十八日頃だったと覚えています。塔頂には日章旗が上がりました。作命より早く進行したのです。現地人は実によく協力してくれました。

ウォノサリー原油は蠟分がとても多いのでその製蠟装置のスケールは大きかった。その一部を運転していて、そこの現地人責任者が肝臓を病んで死亡しました。診療所の〇〇（軍医中尉）が解剖するので立ち会ってくれと言われて、初めて死体解剖に立ち会いました。

肥満体で、肝臓は異常に大きく見えてドス黒く、また心臓を軍医は切り取って見せてくれましたが、早く縫い合わせてくれと心で念じていた程、嫌な立会いで、その日の夕食はまずかったものでした。

流出したままのガソリンは燃焼効率が低いので、これに四エチル鉛（液体）を主剤とする液を加える作業をする加鉛装置は順調に事故者も出ず慎重な運営をしていました。この加鉛作業に慎重を期せよという通達が南燃本部から来たことがあります。実はこの添加剤のドラムと兵員を同居させて輸送したので、戦地へ赴く前にこの液の毒性蒸気により神経をやられ、発狂投身などの悲しい状況が生じた事実があった由でした。

工場のすぐ南にはソロ河が流れていて揚水場があり、これを浄化して工場用及び一般住民用に供

給していました。ソロ河とは即ちブンガワンソロである。土質から乾季雨季を問わず濁っています。浄化剤は硫酸アルミニュームと過マンガン酸カリでしたが、在庫が数日分しかないと呑気なことを言っているので、急いでトラックを仕立ててスラバヤの本部へ行き手当てをして急場を凌ぐ一幕もありました。

昭和十八年四月に工場の機能が動き出しましたが、一方ではビルマ戦線の風雲急で、蒸留塔を解体、チェプーへの移転のための作業隊を編成して、遠路ビルマへ向かいました。苦難の末、無事、塔の本体が到着、組み立てがほぼ完了した頃、独りで仮設の鉄塔へ昇ってみましたが、いざ降りようとして足元が震えて来る始末です。集中力が大事なのを改めて覚えました。

重油をスラバヤへ送るパイプには一五〇馬力のポンプを用い、スラバヤへの中間地点に同様のポンプを備え順調に送油を続行。昼夜兼行で送油した頃は、戦果が上がっているなと感じられましたが、やがて送油待ての指令が来ます。ガソリン、灯油ははけるが重油が満杯ではどうしようもない。池を掘って流し込めというのである。これも戦争だし、何か不安を感じ始めました。

スラバヤの海軍基地に遠縁に当たる者がおり、出張の際挨拶に行きました。たまたま来る前線からの戦果は残念ながら悲報で、そのあとマイクから流れる軍艦マーチは悲壮に聞こえて、早々に辞去しました。

昭和十九年五月に入って、ウオノコロモ工場が爆撃を受け大損害を蒙り、復旧にチェプーから支援しました。幸い隊員の負傷者はごく軽い程度のものでしたが、機銃弾が股間の急所をすれすれに抜けたなどの話がありました。

この頃からチェプーも毎晩のように空襲警報をうけるので夕食後はすぐ出動の態勢をとりました。スラバヤ出張中上空の敵機に向かって気休めの高射砲が火を噴くのですが既に制空権は敵方に

あったのです。チェプーでも珍しく爆音を聞きましたので友軍機かと思いましたが、それは敵機だと本部から知らされ、防空壕へ退避しました。爆弾の落下音は自分へ向かっていると思い覚悟しましたが、炸裂音や振動で、生きていることを知りました。空は曇っていて工場は被害はありませんでした。

バリクパパンの石油基地がやられたニュースがあり、次はジャワだと思っていましたが、後で分かったことですが、ジャワは見捨てられていたのです。総軍の参謀が「お前らの最後の陣地は決められてある、無から有を生ずる信念でこの危機を乗り越えろ」と諭されました。

だんだん食糧が不足して来て、野豚狩りをしたり、スッポン捕りをやりました。夕日が落ちる黄昏時に雄鹿を一頭、オランダ銃で仕留めたのが私の最大の殺生でした。

広島が特殊爆弾で被災したとの報に、早くも敵は原子力の工業化に成功したなと話し合い、心の中で負けたと感じました。数日して、守備隊長のK大尉が涙ながらに降伏を示唆する様子でこちらが宥める役に回りましたが、これが事実となって、工場をインドネシアに明け渡し、蒸留塔にはネシアの旗が掲げられて、抑留予定地へ荷を送り出すこととなりました。

世情は急変、大和魂が負けたのなら、インドネシア魂でジャワを守ると決起したネシアは頑張って連合軍を上陸させなかったのです。日本人は安全に守ると言って、我々の地区はマディオンの刑務所行きとなりました。荷は届いてないだろう。チェプーを去る前夜は隊員の三カ月分の軍票を守って徹夜で頑張りました。うっかり自分のは身につけておらず留守の間になくなっていました。負けて軍票はもう無力の筈でした。

所内では勿論囚人と同様の待遇でしか扱ってくれません。交渉委員を出して諸要求を出すが思うに任せず、陰忍の日々で、粗米の籾拾いが日課で

した。籾は自由になりました。二階から下の溝にくるスッポンを釣る、枕元に生まれた鼠の子も食べました。煙草がきれて、野草を干してのんでみたり、極限に近い状況で、皆やせ細ったのです。水の使用も制限をうけ、バナナの皮も捨てられなかったのです。

所外へも出してくれず、同僚の一人に薬がなく、脳神経もやられた末期症状は悲惨で、やがて他へ移されました。盲腸の兵が出ましたが、薬が届いて軍医中尉の手術は成功しました。

海軍の部隊が入所して来ましたが、軽機を分解して持ち込み組み立て中を見つかり没収されたり、無電機も一度組み立てて海上との交信をやったとか、海軍の志気は衰えていませんでした。所の管理が文官から軍に移った時点から交渉が好転しました。日本語がわかり、歩兵操典の基本を叩き込まれた兵補がかつての上官を監視する状況なのです。私物の軍足などは食料に化けたり、タバコに代わったりヤミは日常のことでした。

警備の兵から外部の状況が伝わり始め、体力の保持がお互いの努力目標となりました。二階へ上がる時に踊り場で一休みしないと息が切れていたのが、屋上でぼつぼつ徒歩の歩数をふやして脚力をつけることができたし、出所した時、皆は駅までを自分の足で歩けたのでした。

収容所はレンバン島でした。プロボリンゴ港へ着き乗船の準備をしました。船底へぎゅうぎゅう詰めでレンバン島へは数日かかり、暑さで参りかけたり、レンバン島では宿営地までの歩行は今までの人生で最大の苦行でした。英軍の点検は紳士的であったし、将校・兵とも丸腰で、好感がもてました。

島では無人の林野を開拓し雨露を凌ぐだけの茅屋や道路造りに献身した部隊の労苦が、よく分かりました。敗戦後も南溟の地に散った人もいるのです。時刻を問わず港への使役に交代で出ました。飯盒には、わざと乱梱を作って砂糖をせしめ

たり、抜け目のない要領が身についたものです。百の物を移すのに九十五あればよいというような目安を、英軍は大目に見ているなどとの由の話が流れていました。従って隊員の体力は増大しました。アタ粉というのをねって油で揚げたのが主食でみるみる太り、肋骨の数も数えられぬ位になりました。

内地帰還の予定は空母「葛城」で、七月十六日と決まり、その前夜はチェプーで見慣れた南十字星の下、頭は日本へ、足は南へ向けて、ちょうど一カ月のレンバン島の思いを胸に秘めて眠りに落ちたのです。

「葛城」の巨大な空間、ゆっくり寛げて祖国への身一つで帰れる喜びが湧いてきました。海軍の嘱託に歌手の藤山一郎氏が同乗していて、毎日懐かしいメロデーを流してくれたのも一層祖国再建への希望を募らせるエネルギーとなりました。

十日の航海を経て明日大竹入港というのに、故郷の家の戦災による焼失を知り、投身した者も出る悲劇もありました。

私が昭和十七年四月十七日、陸軍省嘱託の発令を受け、昭和二十一年七月二十六日復員解職までを計算すると四年三カ月と九日となります。国が開戦した昭和十六年十二月八日から、敗戦の昭和二十年八月十五日までは、三年八カ月八日を経過しています。